

残そう、自然の宝石箱・のりくら

くらがね通信

No.14 (秋号)

乗鞍岳の自然を考える会

平成15年10月20日発行

乗鞍スカイライン利用減、負担増

乗鞍自動車利用適正化協議会が10月14日に開かれ、入り込み客が予想を大きく下回り、それにともなう収入減を補うため地元一市二村（高山市・丹生川村・上宝村）の負担金を今年度610万円、来年度は650万円に引き上げることを決定した。今年は天候に恵まれず終日通行止め12日（過去5年で最長）、時間通行止めを含めると約1ヶ月間通行できなかった。当会が以前から主張している「自然融雪を待ってからの7月開通」ならば負担金も少なくて済むのではないだろうか。

会議では開通期間や除雪などの運営上の課題についての検討組織を新たに設置する事になった。「ゴールデンウィーク前の開通」との要望もあり気がかりだ。シャトルバス利用者は少なかったが、観光バス・タクシーの利用は増加している。今期だけを見ていては次代に良いものが残せるとは思えない。

環境講演会開催案内

『飛騨山脈と乗鞍岳の生い立ち』

講師 岩田修 （飛騨地学研究会・三枝小学校教頭）

期 日 11月29日（土） 午後7時より

場 所 高山市民文化会館 入場無料

主 催 乗鞍岳の自然を考える会

乗鞍岳は北アルプスの南端に位置する火山帯の総称で独立峰状の成層火山です。今年、気象庁は活火山の定義を「過去約1万年以内に噴火」に変更した際、噴火危険度三段階のうち危険度の低いCランクとしました。飛騨山脈・乗鞍岳はどのようにできて今の形になったのか、どのような山なのか。長年飛騨地域の地学研究に携わってこられた岩田修さんの講演会を開催します。友人を誘って多数御参加ください。

乗鞍マイカー規制一年目

会長 飯田 洋

乗鞍岳山頂の初冠雪は少し早かったようですが、まもなく雪に閉ざされて今シーズンは幕を下ろします。乗鞍も山岳域の自然公園として尾瀬、富士山、立山、上高地などに続いてマイカー規制を行ない、何かと新聞紙上を賑わしましたが、環境保全の山としてまだ生まれたばかりです。上高地においては平成8年から全期間マイカー規制がなされ、それでも人気は衰えることなく毎年約200万人が入山し超過密となっていたため、平成16年からは7月24日から8月22日まで観光バス、マイクロバスを全面的に規制することになり、乗鞍の一步先を歩んでいます。

当会は、マイカー規制に対し、乗合バスとシャトルバスのみ通行させるべきだという意見を出していましたが、適正化協議会はマイカーのみ通行を制限し、観光バス、マイクロバス、タクシーの乗入れを認めてしまいました。また開通時期についても、縄張り形成期から抱卵期のライチョウへの脅威を避けるため自然融雪をまって7月に開通すべきと意見を表明していましたが、協議会は雪の見物やご来光観光などをさせるため従前どおり5月開通としてしまいました。

国立公園はわが国の傑出した自然風景地を保護し、国民の保健休養に供するだけでなく、平成14年の自然公園法の改正により3条で新たに、自然生態系が自然景観を支えていることに着目し、それを適正に保全していくことを求めるようになりました。たしかに、マイカー規制により、従前のマイカーによる入山者は大幅に減り、静かにはなっていますが、乗鞍岳においては自動車道路が開通してから30年間で、貴重な美しい自然生態系を食いつぶしてきたと言っても過言ではありません。生態系に根ざした、これからの保全の目処や計画は立っておらず、糞尿、外来種、ペット、登山道の荒廃など、まだまだ問題は山積です。

また、マイカーに代わって観光バスが増加してきており、最盛期の一時期に観光バスが集中して上がってくるため一挙に駐車場施設周辺に人が溢れ、その意味では人に因るオーバーユースも解消

されていません。

国内初の環境保全税の導入についても、乗鞍地域の自然環境を保全するため法定外目的税として導入されたわけですが、租税の対象地域は畳平周辺の人工施設のある所を「乗鞍地域」とし、その周辺の過剰利用に供される地域に限っています。畳平駐車場で観光バスから環境税を徴収するため通過車両は徴収されません。反面、租税徴収のため従来は畳平手前の各所で停車して休憩できる駐車帯があったのに、それを使えないようにしてしまっています。また、税の使途は排ガス、植生、酸性霧、ライチョウなどの自然環境影響調査、植生回復技術の研究、乗鞍環境パトロール、乗鞍環境指導員などの諸費用に充てられることになっていますが、その具体的な使途や内訳はまだ不明です。せっかく収められた税ですから、単なる監視や見回りのための人件費に大半を使われないよう、訪れる人のマナーを高め、保全のために有効に活用されるべきものです。

マイカー規制により自然環境への負荷が今後どのように変わって行くかまだ解明されていませんが、畳平駐車場など舗装地区、木道整備のなされている地区、普通の登山道、整備再生地区など特別保護地区の中を更に細かくゾーンごとに区分して、山頂地域の人の過剰な利用を分散、制限したり、一方通行にするなど、いろいろな手法を考え知恵を絞らねばなりません。

今年の観光客の減少を憂い、規制を強め自然保護を優先すると観光客が益々減少するとして5月以前の早期の開通を目指す意見も出ているようです。しかし、オーバーユースによって混雑すれば、訪れた人々の心理的な満足度はそれだけ低下しリピーターも減少すると思われます。夏の上高地は、誰も知ってのとおりの人ごみで、長野県自然保護連合の町田氏の話しによれば排気ガスは長野市中心街の国道よりも汚染されていたそうです。

乗鞍が、そうはならないように、後世に残していくことこそ、地域の持続的な発展にも繋がるものだと思いますが、皆さんは如何でしょうか。

おもな出来事 (8月～10月)

■ 中部弁護士連合会が調査・視察

8月8～10日にかけて日本弁護士連合会(日弁連)中部弁護士会連合会と岐阜県弁護士会の公害環境委員会の一行17名が乗鞍岳マイカー規制・中部山岳国立公園のオーバーユース等について岐阜県丹生川村・長野県安曇村・大町市にて調査・視察を行なった。視察に先立ち弁護士会が提出していたマイカー規制等に関する質問状対しての回答を丹生川村・安曇村両役場にて受けた。また大町では砂防ダム問題等調査、山岳博物館にてライチョウの生息・環境等について調査をした。

■ 旧乗鞍青屋登山道復興調査

8月30日、岐阜県朝日村の有志で作る「乗鞍青屋登山道を復興する会」が一般募集も含めた約40人で登山道調査を行い旧登山道に設置してあった石仏一对二体を発見した。(下記参照)

■ 安曇村乗鞍高原有志が登山道を整備

9月4日、安曇村乗鞍高原の有志でつくるNPO法人「北アルプスネイチャートラスト」が乗鞍高原から山頂までの登山道を整備した。この登山道は以前からあったがマイカー登山に押され一部の人しか利用してなくて荒れていたのを今年からのマイカー規制に併せ乗鞍の自然をゆっくりと楽しんでもらおうと整備した。

■ 乗鞍岳の環境について日本山岳会が討論

10月11～13日、(社)日本山岳会自然保護委員会が『2003 自然保護全国集会』を岐阜県下呂町で全国から約80名が参加して開かれた。今年のテーマは「環境保全と登山のあり方を考える」と題して主に乗鞍岳の環境についての報告・討論が行なわれた。乗鞍岳の報告では会員で当会の運営委員でもある伊藤茂さん(岐阜県山岳連盟会長)が「乗鞍岳の高山環境今昔」と題して報告した。討論では「山岳環境と野生生物の未来」「車両規制の功罪—乗鞍方式を考える—」でそれぞれ熱のこもった討論が行なわれた。

■ 乗鞍自動車利用適正化協議会が開かれる

10月14日、「乗鞍自動車利用適正化協議会」が開かれ、今年度の9月末までの入山者は約20.2万人で昨年を除く過去5年平均の約57%、マイカーからシャトルバスへの移行も約18%と当初予想の30%減少(約45,600人)。それにより収入減となり三自治体の負担金が今年度110万円、来年度150万円増額することになった。なお観光バスの利用は30%増(5,600台、約147,000人)、タクシーは倍増(約2,000人)となっている。今年通行止めが12日間(過去5年で最高)もあり長梅雨・冷夏など天候の影響が響いた。

眠る旧乗鞍青屋登山道の道しるべ

石仏 新たに一对発見



今年の石仏調査で新たに見つかった44番目の石仏一对
11月30日午後2時20分、大野郡朝日村、九蔵ノ尾根

朝日村住民有志が復活作戦 ルート解明に一步

北アルプス乗鞍岳(三、八〇二メートル)へ登る「旧乗鞍青屋登山道」の復活に唯一の手掛かりとなる埋もれた石仏を探すプロジェクト「復活乗鞍登山道」の住民有志「乗鞍青屋登山道復興委員会」は、二十四番「橋上忠二郎」と彫られ、木の根株付近の土に埋まっていた。旧乗鞍青屋登山道は、一八九九(明治三十二)年、青屋に住み修験道を信仰していた上牧太郎之助さんが開設し、登山者が道に迷わないよう、青屋から乗鞍岳までの約二十、三間の八十八カ所に一对一対の石仏を設置した。しかし乗鞍スカイラインの開通により利用さ

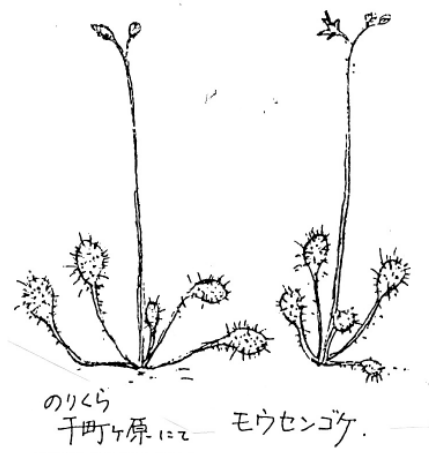
れず、一部ルートは分かれなくなり、二年間、先祖の偉業を惜しんだ地元有志が登山道を復興しようと運動をおこし旧登山道を調査。村も過疎化一千万円をかけて今夏までに同登山道はほぼ復興したが、完全な復興を目指して石仏を探している。同日の調査は村民ら約四十人が参加し、乗鞍岳山頂から青屋へ降りるコースを歩いて探した。上

牧さんの孫武雄さん(七十四)と同行。今回調査で、八十八カ所に設置された石仏のうち、五十二カ所の位置も確認された。(沢野都)

岐阜新聞
8月31日付

行事報告

- 8 月 12 日 第 4 回『自然談話室』 伊藤茂 (高山文化会館)
8 月 2 日 NHK名古屋放送局取材・収録 (飯田事務所)
9 月 19 日の「ナビゲーション」にて放映
8 月 22 日 運営委員会 (高山文化会館)
8 月 2 日 乗鞍岳自然観察会 (乗鞍岳)
9 月 9 日 第 5 回『自然談話室』藤本健三 (高山文化会館)
9 月 18 日 運営委員会 (高山文化会館)
9 月 28 日 乗鞍利用現地視察・自然観察会 (乗鞍岳)
10 月 15 日 第 6 回『自然談話室』 川村孝一 (高山文化会館)



公開講座『自然談話室』

5 月から始めた『自然談話室』、参加者から好評を博しています。参加者から「えっ、そうだったのか。今まで思い違いをしていたんだ。」とか「あっ、そういうふうに見るといいのか」などの声が聞こえています。講演会などでは聞くだけで終わってしまいそうですが、談話室はグループの会話感覚で自由に発言もできます。友達も誘って参加してください。これからものの見方が変わってくるかもしれません。高山市民文化会館、夜 7 時に待っています。

11 月 5 日 (水)	小笠原昌一 (元乗鞍郵便局員)	乗鞍とともに
12 月 9 日 (火)	熊崎昭之 (野鳥の会支部研究部長)	乗鞍をわたるタカ
1 月 13 日 (火)	芝原靖 (高山西高校環境情報部顧問)	環境情報部の活動

■会員の声 (投稿欄)

乗鞍に生きた人々

福井 重治 (久々野町)

『飛騨春秋』の表紙に写真を連載している田中豊氏が、その見返しに解説と所感を付けている。ファインダーからのぞく眼が何を見つめているのか教えられて面白い。2003年5月号には、昭和34年の豊平駐車場を鳥瞰的に撮った写真が載せられている。駐車場は大型バスでほぼ満車だ。田中氏は、本年度から始められたマイカー規制をその写真と重ねて「昔帰り」と表現し、歓迎している。ただし、その「昔」というのは昭和

16年に着工した軍用道路の建設工事と同23年に運行が始まった乗鞍登山バスに始まるから、正しくは「一昔」というべきか。

さて、この機会に、質の高い編集を続けている『くらがね通信』を創刊号から読み返してみた。読んでいて気付いたことに、乗鞍の昔をあつかったものは信仰を、今をあつかったものは自然をテーマにする傾向がうかがえるという点がある。ふたつとも、人と乗鞍との関わりを知

るうえで重要、かつ深刻なテーマであることはいうまでもない。

しかし、ここでは、少し視点を変えて、江戸時代に乗鞍を生活や生業の場として生きた人々の姿を取り上げてみたい。山中に住みついた人々が、具体的に山とどのような関わりをもって生きてきたのか。7割が山に覆われているこの列島に生きた人々の生涯や生活は、実はこれまであまり探求されてはこなかった。その理由として、日本人の生活とは田を耕して米を作ることにある、という観念にとらわれているためだともいわれている。いわゆる水田中心史観によるとらわれである。飛騨の場合も、稲作農民ばかり追っているのは、この地で育まれてきた固有の社会や文化をとうてい理解することはできない。

江戸中期、山の世界に精通した人物に上村木曾右衛門満義がいた。彼は高山役所の地役人で、元禄14年(1701)から30年近く就いていた公務の集大成として、延享3年(1746)に『飛騨国中案内』を著わした。私がこの著書を面白いと思うのは、現地で実際に見聞したことを記しているからである。彼にとって公務というのは、各地の番所詰であったり、御用木・白木・木地それに鉱山を直接に監督する仕事であった。しかも、上村の家は、少なくとも曾祖父の代から同種の仕事に携わっていたために、家に受け継がれてきた記録や伝聞にも恵まれていた。

著書の中で上村は、飛騨の村々から乗鞍へ登るコースを7つあげ、その中で平湯村からがもっとも距離が近く、四つ嶽を経由すれば道もよいと記している。そして、「右、いずれも飛州乗鞍頂上より見分かくのごとくに候」とあるように、彼は乗鞍頂上に立っている。いったい彼は何を目的に乗鞍に登ったのか。

思うに、彼が乗鞍に登ったのは1回ばかりではなかったはずだ。彼の同僚はもちろんのこと、かつて同じ役職にあった者たちも登っているはずである。なぜそのように考えるのかというと、それが地役人の仕事だったからである。地役人たちは幕府の役人として山を管理し、山で働く人々の仕事に目を光らせた。地役人の行く所に

は、当然のこと山に生きる人々がいた。その中でも最も人数が多かったのは、木地師や杣集団である。杣には大きく分けて、杣株という特権を持って幕府御用木の伐採に携わる者と、屋根板・天井板・壁板などの民間材を伐り出す者とがいた。

一方、林業に携わるもののほかに、鉱山に関係した人たちもいた。ここでは紙幅の関係上、鉱山関係者を見ていきたい。上村は前著の中で、平湯鉱山について次のように書いている。

平湯大滝の東の方角を登っていったところに鉱山がある。はじめてそこで銀を採掘したのは明暦3年(1657)8月のことで、発見者は平湯村の久左衛門であった。久左衛門は銀の鉱石を持ち帰り、信州の左次兵衛という者に見せ、現地を案内して掘らせた。採掘には高山藩の許可が必要で、藩から70俵の米を前借りして稼業した。そのとき、摂津国大坂の角兵衛なる者も稼業した。また、近年では高山二之町の池上屋平六という者が稼業した、と。

いずれにしても、上村が見聞した平湯鉱山の採掘は零細なものであった。飛騨全体で見ても、鉱山開発のピークは戦国期から江戸初期のことだとされる。上村も知らない古い時代に、乗鞍でも鉱石の採掘が盛んな時期があったことも十分考えられる。上宝村は戦国期までは、江馬氏の支配下にあった。しかも、かなり早い時期から江馬氏との結びつきが強かった。平湯や栃尾あたりには、今見や南といった武士的な有力者もいた。彼らの拠って立つ基盤が何であったかについては、鉱業を抜きにして想像することは困難である。

このように見てくると、生業や生活というのは自然と全面的に関わる。それに対して、観光というのはスポットということばに言い表されるように、自然との局所的な関わりである。そういう意味で、生活者に学ぶ点はまことに多い。乗鞍で生活した者が持っていた、山塊全体を見渡すとともに細部を知悉する能力。それを少しでも復元していきたい。

大尾根と千町ヶ原開発

昭和7年、飛騨山岳会員が、丹生川村山口地内大尾根にスキー場適地を発見し、調査を行った。それを皮切りに、翌年県議白野啓助・県体育主事らの一行が実地調査に訪れた。たまたま飛騨出身の牧野良三が通信次官であったから、山岳会はこれにスキー場開発の援護を依頼し、その結果名古屋通信局・名古屋鉄道局からの調査団、スキー権威者らが続々現地入りし、地元側も出県陳情に努めた。牧野は清涼飲料会社のカルピスから、スキー場の開発資金として30000円の出資を約束させ、資金面の手当ても調い、早くもその夏から始めて、大八賀村の村民や斐太中学生徒らの力による突貫工事で、大尾根道のみならず、丸黒山を経て千町ヶ原に至る山岳道路も完成した。さらに大尾根には三階建て収容人員50人のヒュッテまで建設された。翌9年の秋には千町ヶ原にも15人を収容するヒュッテが建てられ、その他日影平・枯松平・桜ヶ根などにも、ヒュッテ・避難小屋などが建てられ、長いコースの安全なスキーツアーを保障する態勢が生まれた。それらは9年の高山線開通と同時に、登山客を乗鞍岳へ誘致する強力

な宣伝材料にもなった。

なお昭和14年度の飛騨山岳会事務報告には、同年6月「飛騨山岳会小屋番人坂本弥作氏、病氣ノタメ登高開設不能ノ申出ナリ。依ッテ各方面へ経営委嘱方折衝セルモ、時局下人的不足ノ折柄、遂ニ適任者ヲ得ズ。今夏小屋開設ヲ見合セタリ」とある。これを見れば山岳会の小屋には、これまでは小屋番が常駐していたということになる。ただし『高山市史』によれば、坂本は高山市空町の人で、20年間乗鞍の気象観測所から旗鉾まで連絡のため往復していたが、この年病気で休んだので、旗鉾の寺田音吉に交替したとある。

昭和10年2月長野側安曇村の村長名で、鉄道省の指定を得て乗鞍岳を国際スキー場にしたいから、「高山鉄道の開通に伴って」、指定獲得の運動に参加されたいと本村に依頼があった。ただし安曇村の思惑は乗鞍岳東面の開発であったと思われる。この指定については、他にも志賀高原・菅平・霧ヶ峯なども名乗りを挙げていた模様で、当時のスキー人口の増加と、受入れ側のスキー客誘致への熱意を伺うことができる。

新入会員紹介（前号以降・敬称略） 平成15年9月末会員数 一般 195名 ・ 団体 5団体
大島真理子（高山市） 田上秀子（高山市）

■ **会員を募集しています！** 年会費 = 個人 2,000 円 家族 3,000 円 団体 5,000 円
あなたの知人、友人に ・ 郵便振替 00800-8-129365
入会をおすすめください ・ 振込先 乗鞍岳の自然を考える会

くらがね通信 第14号（秋号） 平成15年10月20日発行

発行者 乗鞍岳の自然を考える会 〒 506-0055 岐阜県高山市上岡本町 4-218-3 飯田 洋
TEL 0577-32-7206 ・ FAX 0577-32-7207

編集室では皆さんからの原稿、ご意見等をお待ちしています。

■ 編集責任者 : 宝田 延彦 E-mail : nobu1995@peach.ocn.ne.jp TEL(FAX 兼) 0577-34-1287
■ 編集者 : 住 寿美子 TEL 0577-34-7237 : 栗田 美由紀 TEL 0577-33-0179
表紙写真提供 : 小池 潜 イラスト : 小野木 三郎 印刷: ウィット企画
